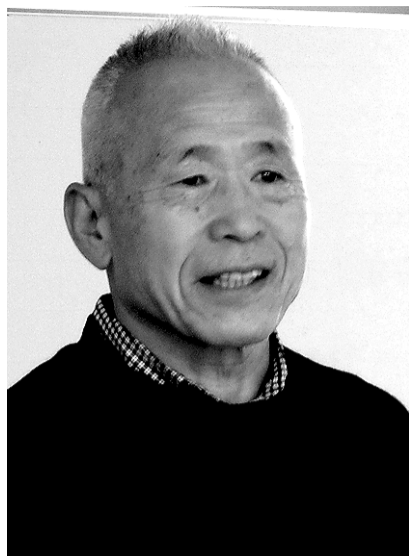


# うなぎの謎に挑む



講演する塚本教授

幅広い活動を通じて建設系NPO法人の基盤強化を図る活動を実施している、シビルNPO連携プラットフォーム（略称：CNCP、山本卓朗代表理事）は、第一回CNCPサロンをこのほど都内で開き、日本大学の塚本勝巳教授が講演した、「うなぎ一億年の謎に挑む」を聴講し、うなぎの完全養殖実現の課題などを学ぶとともに、懇親会で会員相互の親睦を図った。CNCPは、土木学会創立

## CNCPサロンで講演 大塚教授

100周年記念事業の一環として設立されたもので、幅広い活動を通じて建設系NPO法人の基盤強化を図り、行政や企業、教育、研究機関、地域・市民組織とのパートナーシップを通じて、より良い地域の構築を目指している。

講師は、日本大学の塚本勝巳教授（アジア鯉学会会長）が、「うなぎ 一億年の謎に挑む」と題し、うなぎの産卵地、生態など、純粋な科学分野で硬い話題にも関わらず、ユーモアたっぷりに聴講者を魅了した。うなぎは、マリアナ海溝の北側でしか産卵せず、何故3000kmも泳いでそこまでいくのか、その謎は解明されていない。

産卵場は雌雄の親ウナギが受精の効率上狭い範囲に密集することから、広くて深い太平洋でその場所を捜すことは難しい。ウナギが絶滅の危機にあることを憂い、資源の保全にも研究成果を生かしてと講演した。

# 土木の協力が必要



「うなぎの絶滅を防ぐためには、生態などの解明を進めるとともに、河川の多自然型護岸の整備などのハード事業も必要です」と話してくれたのは、CNCPうなぎ完全養殖インフラ整備事業研究会の、三井元子代表と、小重忠司幹事。小重幹事は、「うなぎを食べ続けるには土木の協力が必要」と河川構造の改善を呼び掛けており、本紙はこの機会を捉え、次のようにインタビューした。

◇

「まず貴研究会の概要からお聞かせください。」

「うなぎを守りながら食文化を絶やさない世の中にした

い、ということですが。うなぎの減少で日本のかば焼き専門店、養殖場などが減少し、社会的な問題になっています。しかし、うなぎ完全養殖の実現は、目前との研究成果も出ております」

「保全に向け特にハード面で聞きたいのですが。」

「3面柵渠では、うなぎやカニ、エビなどが潜り込めませんので、自然な川づくりを行うことが必要です。国土交通省でも多自然川づくりを進めています。しっかりとした矢板を打ち、治水面には十分に配慮しつつ、生物にやさしい護岸整備を進めるということです。コンクリート護岸に後付けで岩を入れても稚魚



研究会で議論を深める

が昇ってこられるということもあります」

「様々な保全団体とも働いているそうですが。」

「うなぎや、その餌生物のモニタリングツールとなる、石倉カゴの設置など、様々な市民団体との連携で、調査・研究を進めています。私どもCNCPでは、土木のどのよう分野でうなぎ文化の継承できます」

「全国の自治体レベルでもその機運が高まっています。川とまちづくりを進めることで、地域の経済が活性化します。今後、完全養殖が実現し、過疎地で養殖場などを手掛ければ、雇用の場の創出も期待できます」

に協力できるかについて、養殖場を見学するなど勉強しています」

「それらの活動のもとになる資金の調達はどのようにしているのですか。」

「みなさんうなぎをこれまでも、これからも食べ続けたいですよね、そのためには自然を守りたい・環境に対する意識の高い企業や団体に協力をいただいています。現状を知ってもらいみんなで問題を解決しなければなりませんので、小・中・高校での教育も必要です。うなぎは特に謎の多い生き物ですから」

「生態系に配慮した川づくりが必要だということですが。」